

巻 頭 言

学 長 森 本 正 紀

紀要は出るべくして、今日まで日の目を見なかった。皆それぞれの職場で毎日が忙しくして居たので、斯く成ったとも云える。

本学は昭和56年第1回生が入学して以来、概ね順調な経緯を辿って来た。気候と土佐情緒に恵まれ、好環境に包まれ、すくすくと発展し今日に至った。1 昨年 of 医師国家試験全員合格は実に嬉しかった。第1回生の100%合格は前例があるまい。

次のメイン・イベントは電算機システムを開学と同時に始めたことで、今では Integrated Medical Information System (IMIS) として本学の実情は全国衆知となり、国外でも知る人ぞ知るである。10年前、米国 Duke 大学と Stockholm の Karolinska 病院が著名なので、調査を始めて見たが、何れも一利一害で飛びつく程のことは無かった。

開学と同時に電算化を目標にして始めなくては、諸事あとで難渋することとして本学では、当初からオール電算化に踏み切った。

現状を反省すると、病室に端末が不足して難渋しておる箇所が多く、まだまだ不備が目につく。併し始めたからには徹底してやらねば意味がない。

国民の医療内容が今後どう変わるか、遠い先のことは不問にして、手近なところから検討してみる。先ず目下死因のトップは癌だが、近い将来いな数年の内に癌は死因第1位から転落し、脳卒中や心筋硬塞が取って変わるであろう。

人生わずか50年と云ったは、僅か50年前のことである。戦前日本の死因第1位は断然、肺結核症であった。それがストレプトマイシンの発見、普及により結核は激減、現在は死因の10数番目にあたるだろう。癌は結核の様に原因

が単一でないので、対策がシンプルにはいかないが、今の調子で研究が進展すれば、数年の内には、癌は死因の第1位から転落するであろう。

それにしても日本の長寿振りは世界の驚異である。男女とも、特に女性の平均寿命が80才18とは、世界のどこも及ばぬところで、人生僅か50年といった時代のことを想起してみると、此の躍進は各国の目を見張るところである。

年長者の多いことも世界中が刮目しておるところで、今後は年寄りを其のまま放置する手はない。年長者の経験は吸い取って有効に役立たせる様にすべきである。

この狭い国で全人口の6.59%が70才以上の年長者で占められ、それが何もせず、遊んでおってはならぬ。年長者も亦、若い者達に依存しては駄目で、不備不足を互いに補い合い、仲良く手を携えて、共存共立に徹すべきである。

最後に最も大切なことは“健康”である。自重自愛して常に健康に配慮すべきである。健康こそは何にも代え難い、云わば宝とも云える。

寝たきりに成って何年も生きている等は、家族や社会の負担に成るのみで、合理的な対策を国の方でも考慮すべきであろう。

健康第1、健康こそは唯一最大の財産である。医学は健康の補助者であり、本人の自覚なくしては、脇でどうしてやることも出来ぬ。本人の自覚を促し、どう教育するか、今後最大の課題である。

(昭61. 1. 28記)